



NISHIOKA, Kiyoshi

アトピー性皮膚炎の定義の歴史

梶島 2006年にフィラグリン遺伝子との関連が明らかにされて以来、アトピー性皮膚炎の治療は急速に進歩し、生物学的製剤による治療も始まっています。私たちはその最先端の部分に注目してしまいがちですが、このようなときにこそ歴史を振り返り、今日に至るまでの変遷を見直す必要があると考え、西岡先生と塩原先生をお招きしました。まず西岡先生から、湿疹の歴史について、ご紹介をお願いします。

西岡 1923年に、Cocaらが正常な過敏症と異常な過敏症の概念を提唱しました¹⁾。正常な過敏症のカテゴリーには接触皮膚炎のようなものが分類され、異常な過敏症にはアナフィラキシー、感染症、アトピーが分類されています。アトピーは喘息や枯草熱を中心とした概念でしたが、皮膚病にもこれに該当する疾患があると考えたSulzbergerらが、1933年に初めてアトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)と名付けました²⁾。

さらに歴史をさかのぼると、それまでバラバラに扱われていた皮膚病を、発疹の形で分類したのがWillanです。1800年代の初頭に、彼の教えを受けたBatemanが書いた教科書では、たとえば丘疹のカテゴリーのなかにストロフルス、苔癬と痒疹があるといった分類がなされ、湿疹は小水疱の疾患だとされています³⁾。

1800年代の半ばになると、lichen planus(扁平苔癬)を最初に記載したことで知られるErasmus Wilsonが、湿疹は小水疱だけではないと主張します⁴⁾。porrigo larvalis(仮面

様膿瘡)(**図1**)という疾患は、膿疱ですから、小水疱の疾患である湿疹には分類されていませんでしたが、湿疹の発疹はさまざまに1つにはまとめられないとして、小児湿疹という概念が提出されました。このErasmus Wilsonの提唱した小児湿疹は難治とされ、この概念がADの大元だと考えられます。

また、1800年代後半には、痒疹をめぐる仏語圏と独語圏の皮膚科医の論争が起こります。von Hebraの名前に由来するHebra's prurigo(ヘブラ痒疹)は、伸側にしかできません⁵⁾。かゆみのため長く掻き続けているうちに、AD様になる可能性も言われていましたが、肘窩や膝窩ではなく伸側に丘疹が出ることから、それは否定されたわけです。一方、Besnierは、10代後半の男性3例の症例供覧をしますが、湿疹が小さい頃からずっと続いていた子と、途中から出てきた子がいました⁶⁾。かゆみを中心にあって長期に続き、全体に苔癬化、湿疹化して、やがて黒く色素沈着を起こす経過をたどるその疾患は、「prurigo diathésique(体質性の痒疹)」と名付けられました。

梶島 それは、ADで認められる所見とほとんど同じですね。

西岡 はい。そして、Sulzbergerが米国で症例を集め、幼児から小児、思春期と3段階の形をとるうち、子供の湿疹はErasmus Wilsonのいう小児湿疹であり、ずっと続くものがprurigo Besnier(ベニエ痒疹)に相当するとまとめました。

Sulzbergerの頃には問題点がほぼ網羅されていて、たとえば食事のアレルギーなどについてもすでに議論されています。ニューヨーク大学のBaer先生の編集された本⁷⁾によれば、SulzbergerやWiseなどが食物アレルギーのア



KABASHIMA, Kenji